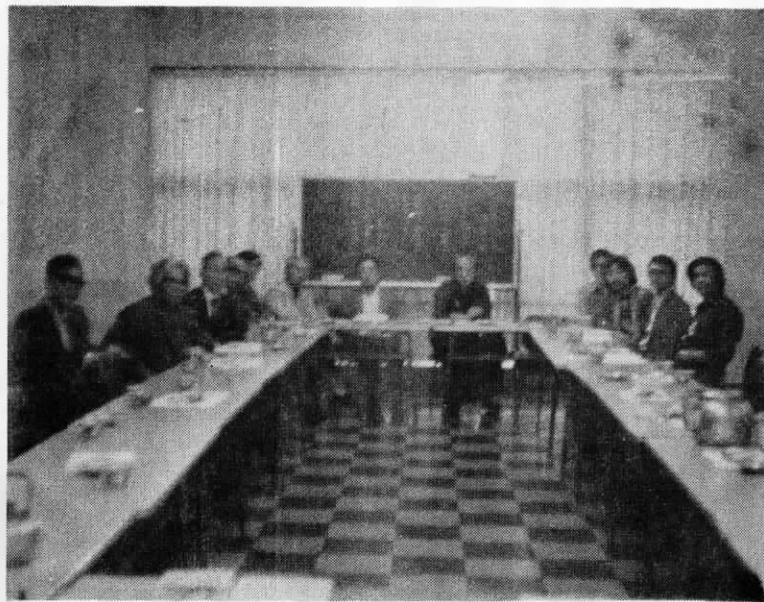


毎月一回15日発行 昭和50年11月15日発行・第70号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

11月号



「読者の会」集会模様

Libertaire VoL, VI, No 11

無 政 府 主 義 誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和50年11月15日発行第70号

リベルテール
定価二〇〇円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1975年11月15日発行 VoL, VI, No.11
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

今月のことば

天皇の戦争責任（アイデーブリデプロアの取扱いについて）

文学方面を研究していますが、曲学阿世の徒に
そういうお答えはよく判りません。

—臣 莫空人—

11月1日は自衛隊記念日です

「町で自衛官をみかけたら

気軽に話しかけてみて下さい」

—ハイ、憲法第九条はいっ

またどうしてこんな日を制定したのですか

—辛直な疑問より—

防衛庁長官殿

あ、わが友よ、

蜜カラ— メロメロの感情家 —と自称愛国者は

極端な合理主義者

共に警戒しようよ。

—帝国主義・廿世紀の怪物

今古貫大道9号より—

目次

巻頭言

1

「売買」という名の強奪

大内一樹

2

「東印」再建記（続）

山口健助

3

自殺とテロルのすすめ

辻義雄

8

「アナキスト小辞典」評

10

野火

11

「リベルテール読者の会」詳報

12

巻頭言 「人民」の立場に立つこと

日本のアナキズム運動の底迷の原因がさまざまに語られている。国家の現代的変貌に対応した理論の未形成、日本の伝統的な権威主義の影響など。だが私には、なによりも運動する主体の未形成・未確立にその原因があるように思われる。日本のアナキスト界には、社会的変革運動をになおうとする者に必要な何かが欠如している。

二つの顕著な傾向が現在のアナキスト界をおおっている。一つは、アカデミズムへの傾向であり、もう一つは、ニヒリズムへの傾向である。

第一の傾向は、日本の学問界や出版界にその顔が向いていて、歴史の発掘・記述や思想の紹介・解説などに活動の中心があるように見える。もちろんこれらの仕事も有益にはちがいないが、問題は、誰がその成果を生かし得るかにある。本屋の書だなをにぎわすだけで終わらなければいいが。第二の傾向は、この言葉が適切かどうかは問題だが、確かにいろいろな形態をとって存在している。現実の社会問題への無関心、無頼漢の徒への傾斜などなどとして。そしてしばしば、この二つの傾向は、同一人物・同一集団の中に共存しているし、私には、どちらも帝国主義日本の支配的文化の影響をよく受けているように思われる。

では何が欠けているのか。一言でいえば、運動者をもつべき「健全さ」が欠けている。「健全さ」とは、私の考えるに、「人民（民衆）」の立場に立とうとする姿勢であり、そこから運動者あるいは民衆のもつべき「単純な賢明さ」をそだて、民衆の生活と闘争に結びついた「明晰な言葉（ロゴス）」を語ろうとする態度である。最近私は、韓国の詩人キム・ジハの言葉（『良心宣言』など）の中に、民衆の闘争と結びついた「健全な」精神と「明晰なロゴス」を見ることができた。

日本の経済的侵略に対抗して立ちあがりつつあるアジアの人民につながり得る日本の人民の闘争は、未だ明確な形態をもつに至っていない。現実になりつつある日本帝国主義とアジアの人民との闘いと無縁のところに、なお日本のアナキスト界はあるのだろうか。

△江藤 敏和▽

「売買」という名の強奪

大門 一 樹

「価格と暴力」

タバコを買う、テレビを買う。電気、ガス代を払い、汽車、電車賃を払う。大衆は金を出してモノ・サービスをうけとるので「買った」と思う。

大衆にとって価格とは何なのか。独占のばあいには、はっきりしている。売手はその地位を利用して最大の利潤がえられるような価格を一方的にきめる、必然性のない価格のフィクション化が一般化する。買手は不当な価格と知っても、値上げされても、買わねば生活できない必需品のばあいにはやむなく買う。しかし、本当に奪られていると知って、抵抗の気流は拡大をみせている。いま、さしあたり電気、ガスの値上げを拒否する運動も熱心に斗われているが、警官出動などで圧迫されて、やむなく支払わされる。

これは政府が一方的に税金をきめ、大衆がなっとくできるとしても取立てを拒否すれば暴力で強制するのと同じ構造だ。

「売買」という自由合意の取引にかわって、暴力にたよっての売手の押しつけに屈服させられる―買うのでは

なく奪られているのである。価格という名の強奪、経済という名の犯罪横行の時代となっている。

大衆の側には錯覚がある。自分の意志で支払ってモノ・サービスを受けとるという形にとらわれ「買った」と錯覚する。売買とは売手も買手も売る買うの自由があることで成立するのだが、形の上で買わない自由はあっても買わねば生きてゆけないと必需品などには買わない自由はない。

奪られているあいふら

アメリカのマフィアは合法企業の黒い暴力の背景で売買の形で高く売り、ニューヨークの物価も高くしているというが、大企業の独占価格と本質は変わらない。

ロサンゼルスの人暴動でかれらは「交換価値（価格）を信じない。必要に応じて取る」と叫んだというが、しかし現実には必要に応じて暴力で盗っているのは大企業である。しかも日常的に「法」に守られて、である。

ブルードンは「財産とは盗み」と宣言して、当時のヨーロッパの経済学者をおどろかせたというが、二年前の買占め、オイル・ショックいらい、日本の大衆は「奪られたものをとりかえす」と宣言し行動するという時代になってきている。大企業が「暴力」による盗奪の「自由」経済を享受してきているなかで、大衆は「力」によってこれを阻止する社会的気流が出てきた。

そういう時代に入りこんできている。

「東印」再建記（続）

山口 健 助

旗上げはしたが

芹沢メモ（東印始末記）によれば、東印が正式に発足したのは昭和十一年八月四日になっている。

新事務所で執行委員会を開き、行動綱領、規約などを整備し、組合歌、マークの募集などをきめている。現有勢力八〇名と報告、まことにささやかな組織だ。

しかし、八月十一日の日刊「社会運動通信」はこれを大きくとりあげている。無政府共産党事件により四散したアナ系の再結集をつたえている。また大道寺三郎君（戦後死亡）は東印が再生されたことについて、印刷労働者の中にアナーキズムの根強いことを改めて見直したと言っている。

東印の基本方針である印刷工戦線の統一については、それぞれのルートを通じて接触を開始した。特に東印の呼びかけについて好意的だったのは、東京出版労働、出版工俱樂部、親枝会などで、九月二十七日の執行委員会と親睦団体対策委員会を設置し、僕が総括することになった。

さらに十月十八日の執行委員会ではあたらしく協力委員会（委員長坂村義雄、書記村井竜太郎）を設置し、次の諸君が分担することとなった。

△出版工俱樂部（加藤栄太郎）△働きましよう会（芹沢喜君）△親枝会（堀江磯吉）△日協（中村茂）△欧工の友（坂村義雄）などで、東京出版は主として僕が担当することになった。

東京出版（高津正道）については、僕にも苦い思い出がある。この組合は俗に労働派、合法左翼と呼ばれ、加藤勤十（戦後・労働大臣）を委員長とする全評（日本労働組合全国評議会）に属し、高野実君（戦後・総評事務局長）が書記長として実質的に采配を振っていた。

昭和五年九月、凸版印刷本所工場にストライキが起きた。これをめぐって東京印連（関東出版）と東京出版の間に対立抗争が生じた。そして東京印連の青年行動隊は京橋・新富町の東京出版事務所に夜襲をかけ、田中組合長と常任一人（高野君は不在）を袋叩きにし、事務所を破壊した。僕は染地署にあげられている。

これはストライキの主導権をめぐり、東京出版と日本出版（共産党・非合法）が対立し争議は惨敗したが、応援にかけつけた東京印連を東京出版が拒否したことである。

当時、争議団のキャップであった加藤栄太郎君は次のように回想している。

「僕が山田君を始めて知ったのはこの争議で、浅草小島町の争議団本部へ、ハンチング、葉っぱ服姿の彼がカンパ基金をもって応援に来た。ところが高野、田中らはいい顔をしない。いやかえって迷惑そうだった。アナがはいるとかくうるさくなるというのか彼らの本音だったのだろう。

これがまた妙なところに幸いしたものだ。加藤君はその後神田の大山印刷（六〇名余）に転職しその工場をオルグした。そして争議を起こすとき、話を東京出版に持ち込んだ。ところが高野君は

「アナが介入するならごめんだ」

と、ニべもなくハネつけた。大山分会が、東京印連（関東出版）の有力な組織として、再建された東印が解散するまで、離反しなかったのもこの辺に原因があるのだろう。

もちろん、高野君とはその後和解した。昭和八年、右翼労働組合の結集体日本労働組合会議に対抗し、左翼の関東労働組合会議が結成されたとき、日本自協、全国自連は積極的に参加した。

関労会議は全労統一全国会議（加藤勘十、難波虎一、

安平鹿一、高野実）総評議会（田部井健次、飯田五平、山花秀雄）東京交通（北田一郎、島上善五郎）東京市従（小野正造）江東従組（神間健寿）などの合法左翼が主体となっていた。

これが母胎となって反ナチス・ファッショ粉砕同盟が結成され、大阪、京都にも組織はひろがり、反戦、反ファシズムの旗の下に果敢な行動を展開した。

また、関労会議は東京市電、地下鉄、映画館のトーキー化反対、松竹レビューなどの争議を斗かい、日本自協の田所茂雄、宮崎静三君などが奪われている。

昭和九年、左翼戦線も新しく地殻変動、戦線整理が行われた。一月、日本自協が全国自連に復帰し、三月には第四回全国大会を開催している。十一月、統一会議、総評、江東従組が合同し、全評が結成されている。

全評は結成早々弾圧を受け、加藤、山花、高野君は檢舉された。全国自連は関労会議の立場から「暴圧反対、即時釈放」を要求し、こんどは僕が警視庁に引っぱられ手荒く痛めつけられた。

高野君とはいわばこうした因縁から深いつながりがあったのだ。

戦線統一成らず

東印再建後、彼は曉民共産党の生き残り高津正道君（戦後、社会党参議院議員）をかつき、東京出版労働を再組織していた。事務所はたしか牛込矢来町であったと思う。

ここで僕は印刷工戦線統一の第一段階として「全市印刷工生活擁護同盟」というカンパニア組織をつくることを提案、両者の意見が一致し、昭和十二年二月十七日、高津正道君の名でアッピールした。

この提案を受けてもっとも大きく揺れたのは柴田隆一郎、坂村義雄君らを中心とする出版工俱樂部であった。

「戦時中印刷労働者の斗いの記録」（三九年・出版工俱樂部刊行）に次の通り述べている。

出版工クラブが結成されてから初めて内部に理論上の対立がおこった。そのころ高津正道氏がコミンテルン（国際共産党）第七回大会の決定である反ファッショ統一戦線方針のもとに、東京印刷工組合、全評系東京出版労働組合と一緒に、全市印刷工擁護連盟をつくろうと、各団体に懇談会を提唱していた。出版工クラブにもこれに参加しないかと招請が来た。これを契機として本部と神田の対立がおこった。

神田支部は前に労働組合をやってきた人ともに全協のメンバーだったというような経験者があつまってい

た。その人たちにとってクラブのゆき方は甘っこいものがあった。

本部側から柴田、白石が代表として参加し、神田支部側から山崎、村越その他が出席して論争した。神田側はあくまで労働組合結成を主張したが、柴田は断固として、「現在のように弾圧のひどい中で、あくまでも親睦会という低い組織形態にして、広汎に職場にくい込み、大衆をつかむことこそ大切なのだと思う」という意見を強調した。

神田支部の多くのものは全市印刷工擁護連盟に参加するため出版工クラブを脱退してしまっただ。そして既定方針にしたかつて高津正道が会長、山崎宗一が書記長となり「全日本出版労働者協会」を結成してしまっただ。しかしこの組織も柴田が心配したように短命に終わった。

協会は五月に創立され、七月には弾圧されている。これは支那事変と呼ばれる日華の全面戦争が勃発し、思想統制が一段強化されたことと、十二月には人民戦線事件が起きていくことにもつながりがある。

これがまた印刷工戦線の統一に大きな障害となったことも事実である。僕は失望した。東印自体もこの協会に積極的に参加する意欲を示さず、運動は「蝸牛角上の争

い」のようにいぜん伸び悩んでいる。

それにまた零細な印刷工場にひんびんと紛争が起き、僕はその前後処理に追われていた。安久社、和田印刷、松田印刷、小川印刷、共立印刷、村上印刷など、しかもその原因は賃金不払い、クビ切りなどで資本攻勢により振りまわされていたのだ。

だが、このような日常斗争をいくらかえしても組織にはなんのプラスにもならない僕は次第に情熱を失ってきた。

日華戦争の始まる五月から七月にかけて、東印事務所はにわかに緊張した空気が流れていた。警視庁、西神田署の監視はもちろん、九段の東京憲兵隊からも思想係が出入りし、もはや行動の自由はなかった。

そんなとき一通の国際電報がどう間違ってきたのか、東印に舞い込んできた。それはたしかにフランスの反戦団体のものであったと思う。

外国語の読めない僕は、それを府下八幡山の石川三四郎氏の家にもって行った。石川さんはそれを読みながら「山口君、これは反戦大会の招待状だよ、君がもしゆくとすれば、二度と日本へは帰れないな」

もちろん、僕としてもゆく旅費はないし、密航するとしても手づるはない。そこで、誰にも知らさずコソソリ

焼きすてた。

自ら陣営を去る

これが端緒というわけではないが、そのころ時代の流れに僕の心境は動揺し、運動に対する情熱は冷却してきた。

芹沢メモによれば、七月八日の感想として「今日までに山口健助が陣営を去ったこと」をつたえており、七月二十三日、日本出版工協会（全日本出版労働者協会）の合同問題として「山口君来訪、上記協会と合同しないかと提議する。僕個人の意見として賛成だが、会長に高津正道をいただくことは面白くないからこれを顧問として、且無産政党とは関係のないことを条件としたい旨言明した。尚日本出版工協会は現在どの程度の組織があるのか調査する必要がある。ともあれこの運動により山田が再び戦線にもどる意思のあることが明白になったと思う。」そして七月二十五日の執行委員会で僕の除名を決定している。その理由として①彼は自己の運動的立場を転回するため日本出版工協会の黒幕となり東印の陣営を攪乱せんとした②会費未納三カ月余に及んだ③最近の行動が組合運動の線を逸脱し組合の発展上不都合である。というきびしい理由だ。

しかし、僕は除名通知を受け取っていない。また加藤

堀江、広瀬君たちも、僕の除名についてはなんら相談を受けていない。と言っている。

除名を強硬に主張したのは、村井竜太郎君（伊藤融）らしい。彼は僕と新潟一般にいたこともあるし、名古屋で後藤広数、成田政市君らと中部黒色一般労働組合を組織したこともある。

印刷工だが、関東出版、東印にはほとんど姿を見せなかったし、再建東印となつてから始めて参加してきたのだ。だが、正直なところ僕が除名された理由はわからない。

たしかに、僕は思想的にも行き詰まりを感じていたし、生活的にも疲れていた。まず自己の生活を確立しなければならぬ。という焦燥にかられていた。

村中氏の「拓殖情報」を編集したり、平野力三代議士の「産業組合時報」（編集者はアナキストの中村吉次郎君だ）に原稿を寄せていたが、それもわずかな収入で一家をたてるわけにはゆかない。それに僕ももう二十八歳だ。いつまでも同志の援助を頼りにする年ではない。生活的にも去就を決するときがきたのだ。

そこで芝・浜松町の斉藤印刷所の経営者斉藤政吉氏と共同し「日本印刷工業新聞」を新しく起こすこととなり、

僕が編集長としてその仕事を担当することとなった。

印刷工業新聞といえばいわば業界紙だ。僕の行動半径も広くなり、接触する人々も多様化してくる。印刷工業の経営者ともつきあいが出来てくる。これが執行委員のカンにさわたったのだろうか。

高津正道君との関連については、既に戦線に復帰する意思をもたない僕にとっては、言いがかりというほかはあるまい。しかし、アナキズム運動に参加して十年、自ら求めて脱落した僕の行動は、ある意味においては時代の敗残者だ。だが、思想的にも終始一貫、その信条を守り、逸脱しなかったことは、せめても救いの一つであろうか。

東印は、昭和十三年二月十三日ついに解散した。戦前におけるアナキズム運動の燈はここに消えた。誕生してから二年そこそこの短い生命だが、狂瀾をめぐらすわけにはいかなかった。（終）

（追記）

後日譚になるが、「産業組合時報」の編集長中村吉次郎君は佐賀農林学校の出身、石川三四郎、鍵田研一、高群逸枝、奥谷松治氏らと交わりアナキストとして、また協同組合運動者でもあった。加村喜一のペンネームで

小説や随筆を書いていた。

昭和八年、岡本利吉氏が経営する浅草・橋場町の大衆食（協同組合経営）でストライキを起こし、僕が応援に行った。争議は敗けたが、中村君は神田の関東出版に転り込んできた。それ以来の交友である。

昭和十三年、彼は招かれて、当町農村協同運動の中央指導部、産業組合中央会に入り、そのあとをうけて僕が産業組合時報に入社、編集に当たった。

さらに翌十四年、僕も中央会など中央機関で構成されていた機関紙「中央産業組合新聞」（社長有馬頼寧）に招かれて入社、これを契機としてその半生を農業協同組合運動とかり合いをもつ身となった。歴史は妙なもので、労働組合運動から農村協同運動へ、新しい世界に眼をひらいたことは、僕の人生にとってプラスであったともいえる。

年間購読料改定

諸般の事情で年間購読料を一二〇〇円に改定させていただきます。一部定価は十六頁建で一〇〇円です。

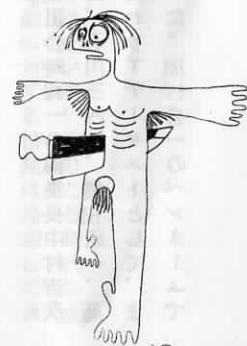
原稿を送って下さい

わたし読む人、ボク作る人ではないけません。わたし書く人、ボク読んで作る人になりたい。

自殺

と テロルの すすめ

辻 義夫



たとえば私が朝起きたとする。最初に考えるのは、トイレに行きたくなることである。これはもう生理学という科学によって、なぜ朝起きるとトイレに行きたくなるのか見抜かれている。そして私はトイレに行く。ここで考えてもらいたい。なぜトイレがあるのか。それは、このトイレを作った大工が今日、私がトイレに入るという事実を見抜いていたからトイレが存在するのだ。もし見抜いていないならトイレは存在しない。次に私は手を洗うために水道をひねって水を出す。これも水道屋と水道局が見抜いている。水道管があり、水が出るという事実。今私が、水が必要になったので、ここで水を出すということを見抜いているから、ここに水道があつて、水が出るのだ。このように考えてみると、すべての人間の行動、思想といったものは、誰かによって見抜かれているのだ。人間は未知のことを追求する。そして人類は進歩する。

だがしかし、今や少数の知識人を除いて、われわれの考え、行動はほとんど調べつくされてしまっている。自分が新しい発見をしたとする。すると一にぎりの知識人は、得意そうに言うであろう。「キミ、こんなことはもう調べつくされているんだよ」「キミの考え方は〇〇〇の考え方だ」と。

この字を書いていること、それも鉛筆があり、紙があることは、誰かが、今、使うことを見抜いていたから、存在するのだ。

精神異常者が増えている。それらは知識人に言わせると、必らず社会の複雑化のための要素が多いと言うだろう。しかしそれはちがう。誰かによって、実は全てが見抜かれているのだ。昔は自分で工夫して、物をつくったり、考えたりつまりは創造的だったから現代のようににはならなかったろう。しかるに中国の文化大革命が一応成功しつつあるのは、自分たちで作り、考え、行動するからだろう。つまり建設的という意味では見抜かれていない。しかし、必らず破綻するであろう。マルクスが、そして毛沢東が未来をあまりに図式的に、教科書的に、ベルトコンベアー式に描きすぎた。それによって見抜かれたのである。人間は他人の描いた未来にそって「はいそうですか」と進んでいくほど単純ではない。

我々はどうしたらいいのだろう。この時点でついに、アナーキズムとニヒリズムが労働者の間から、いや全ての人民の間から提起される。私自身の主観的な考えを示そう。

我々は少しでも見抜かれない行動や思想を持つべきであり、それらを社会的に実践しなければならぬ。なぜなら社会的実践から思想が生まれるからである。見抜かれない行動とは、たとえば道路に急にすわるとか、いきなり大声を出すとか、つまり非常識、非習慣的なことをすればよい。なぜなら常識とか習慣は最も見抜かれているからである。あらゆる常識、習慣をぶちこわせ。

非常識なことをすることによって、無力感、孤独感、絶望感はなくなくなるであろう。なぜなら不完全ながら、あまり見抜かれていないからである。そしてその最高段階としては自殺と殺人である。今再び例を示そう。ある人が、この世の中に絶望して、その自分の地を離れ、旅行するとする。旅先の旅館、名所などは、その人を見抜くであろう。（旅館にとまるだろう事、名所を見物するだろう事など）そこで、そういう所はやめて、人のいない山に行つて野宿しようと、山道をどんどん登って行くとする。しかしここでも見抜かれている。なぜなら道が存在するからだ。だれかが、ここを人が通るだろうと見抜

いて道をつくっておいたのだ。その人はどうしようもなくなつて自殺したとする。この自殺は人に見抜かれていない。なぜなら、もし誰かがこの自殺を見抜いていたら止めたであろう。あるいは見物人が押しかけたであろう。そして自殺が成功する直前、その人は、生きている実感をつかみ、絶望感などを克服するであろう。なぜなら人に見抜かれていなかったからである。

殺人も同じである。見抜かれていない。なぜなら、もし、誰かが見抜いていたら止めたであろうし、また、その被害者は逃げたであろうからである。私は殺人狂の気持ち為何となくわかるような気がする。

とにかく人間が死ぬとか生きるとかいうことは過去、現在、未来を通して真に根源的な問題だと思う。そしてそれを解くことが客観的には、ニヒリズムとアナキズムであり主観的には、自殺とテロルの中に存在するのだと思う。

『アナキスト小辞典』評

意外にも早い上梓でびっくりしました。そして開いてみて、思いの外多数の人達がとりあげられているのに二度びっくり、そしてほくも又少し違った形で書こうと色

りだった事と心から敬意を表します。(杉藤二郎)

日本だけでも大変なのに外国まで入れてご苦労様でした。勿論完全なもの(色々の事情もあって)はむしろかしいと思いますが、あなたも云われている様に、今後の増補が続けられねばならないでしょう。(すみぜんいち)

御多忙の中でこれだけまとめられたこと、御苦心の程お察し申し上げます。序文にも書かれたように、世評や意見など色々ですが、これがどんなに有意義であるかは、これを見、これを使う人だったら分ることです。この後も資料を整備して更に増補されますよう祈ります。

(三浦精一)

貴兄でなければやれない面倒な調査、大変に御苦労があったことを推察、又その熱意に感服します(河本乾次)

まことに御苦労さんでした。アナ系人名辞典1未定稿1ならわかるが、これにしても非常に未完である。高尾平兵衛はよく調べてありますね。(白井新平)

御労作敬服いたします。前書を拝読しても、こうした

々調べている人達のことについて、意外にも知らないことが書かれていてその貴重さに三度びっくりしたというしまつてした。最初にこのような形のものをとまかく出すという御苦労は、知る者ぞ知るで大変なこと、想像するに余りあります。それは前にお作りになったアナ年表にも云えるでしょう。近視眼的な人達からアレコレ小さなことを文句つけるといったことがあるだろうな、と考へながら、これをよりふくらませることに、今後多少でもお手伝いをしなければと思います。あらためて貴兄の先駆のお仕事に心から敬意を表します。(向井孝)

近代日本史上にアナキズムは不当に過小評価され、それに携わった人々も地に埋没した今日、貴兄のためな努力により発掘されたことは大きな歴史的意義をもっております。(山口健助)

毎度のことながら貴兄のお仕事の早いのには感服いたします。誰かがやるかも知れないことに先鞭をつけた意味では貴重なものと言えます。(水沼浩)

我々の文庫に有意義な文献を一つ加えて下さった事に感謝すると共に、出版に至るまでにはさぞ御苦労もおあ

資料の収集がどんなに大変なものがよくわかります。私の周辺におられるアナキストの方々も、お互いに自己の立場出張が強く、なかなか運動がまとまってゆかないことが良くわかります。(川合澄男)

これだけ調べられるのは仲々に御苦労だった事と存じます。お骨折に深謝します。(大沢正道)

所々あけてみえますが重宝です。「ハギシン」とは何者かと頁をくつてみたが出てこない。そういう脱漏も多少あるのでしょね。(森長英三郎)

「A五判一六頁で限定自部しか作らなかった。残部若干あり、非売品だが御希望者には実費二千元でお分け致したい。萩原」

野火

☆十一月八日、お茶の水・電通会館で午後6時よりA読む権利を奪わせない会V主催「読書週間にあてて」の集会に出席した。講師久野収氏の話は「読み手と書き手の間で成立する読む行為は法的規制をするべきでない」というのが主旨で、氏の頭脳の中では両極端としてアナ

「キズムとファシズムが居坐り、中庸としてルソーのボロネ・ジネラル（一般意志または同氏の意味では市民階級）が存在すると見受けられた。平等について知識（情報）の独占がこれをばむとするのは当然だが久野氏は経験がそれに伴わなければ、ヴェトナムにおける米国の情報活動の轍を踏むと警告している。

その後の集会は本の流通をどうするか、現在蒙っている弾圧をどうはね返すか等話題になった。気になるのは主催者側の人が「下部構造」としての印刷と規定することだった。いつ印刷が下部構造に組込まれたのか判らないが、本屋からみれば著者と本が上部構造で、昔から縁の下力持ちの印刷は下部なのかも知れない。だが問われているのは平等であって、差別ではないが区別して考えるのなら、一冊の本を作りあげる手間から考えて下部構造は上部構造に異議申立てをここですべきだろうと思う。（H）

☆今、不景気で皆、お金なんかあまっていなと思う。でも裁判などを続けている人達はそれ以上にたいへんだ。で、気のついたカンパを送り先をしるす。

○江川充通さん強盗未遂・窃盗容疑で起訴

東京都小金井市東町5の30の2

振替口座東京8の一九〇〇二〇時田昌瑞

来を語る会として催された。

当日は雨も降っており、東京の豊島振興会館はいつになく静か、十五名の人々が参加した。

以下、まず会の進行、及びその内容、討論、まとめなどを順に記しておく。

一、はしもと挨拶、会議進行の案内

三浦 挨拶 アナ運解散後、現在のリベルテールまでの報告。『「リベルテール」誌は偏狭なものでなく、全国の無政府主義に関心のある人々に支持して欲しい。又若い人々の参加を期待したい。』

萩原 挨拶 『「リベルテール」のメンバーの一員として力をつくしたい。』

一、はしもと、編集部紹介（編集部、はしもと、山本、武藤、甲斐）

山本 挨拶 『今日は記録する者として』

武藤 挨拶 『エスベラントを通じて努力』

甲斐 （当日不参加）

はしもと『同人の一人として最初より参加、これからもつづける。』

一、三浦 会計説明（昨年10月より今日9月迄）

収入 35万一千八百五円

激励先・横浜市港南区南4の2の3 江川様

○黒ヘルゲリラ戦士公判対策委（71年頃の爆破事件）

渋谷区本町一の十四の三・田村方 水木護

○富士高放火事件・加納君を守る会

豊島区池袋二の九〇六 練馬区民新聞社方

○立川自衛隊監視テント村（10月8日火災にあう）

立川市高松町3の3の3・芳水荘3号加藤方

○土田・日石ビース缶爆弾フレームアップ事件

杉並区高円寺北3の1の12・現代史研究所方

○林景明さん国籍確認訴訟・樺太訴訟

練馬区関町五の一六九・町田方

あまり関係ないとか、裁判なんてダメだ、と言わないで、裁判でも述べるといふことによって正しさを主張しあい、社会の意識変革のため少しでも歩んでいこう。（狼の事務所わからないので載っていません。） Y

「リベルテール読者の会」詳報

10月12日、リベルテールの会は初めて「リベルテール読者の会」というものを催した。この会は別にリベルテールを読んで下さる人と創る人の交流会というものでなく、実質的に現在ある「リベルテール」誌の現状と将

内、毎月きまって拠金して呉れる人、三名。購読者は有料にて百七十三名。九四名は年間千円以下。八九名が千円以上。月平均二千七六七四円。（若干のズレがある。）一九七三年度収入は三十万四千七百七十五円。月平均二万五千四百〇〇円。

支出

通信費十万九千五百〇〇円。月九千三百〇〇円
消耗費二万一千三百七十五円。月一千七百八十一円

印刷費二十八万八千円。月三万三千円

現在借金として十二万五千円

以下細目略

現在「リベルテール」発行のためには月五万

三千円が必要。

一、機関紙など受入れ状況

海外の部 三浦

十月より九月まで四九六種受け入れ。国別では伊七、仏十七、スイス一、ベネゼラー、フィンランド一、スペイン一、独四、ポルトガル二、英五、米八、ウルガイ一、カナダ五、メキシコ二、ベルギー二、オーストラリア四、香港一、スエーデン一〇、言語別では伊七、仏十七、スペイン十八、

英十八、独五、ポルトガル二、フィンランド一、
ベルギー二、エスベラント一。

日本の部 山本

「現在の所、月別、地域別等の集計はとっていない。受け入れたものは「リベルテール」誌上になるべく発表していくとともに保管」

このあと、今後「リベルテール」誌をどうするかという
ことを中心に討論がおこなわれた。以下主なものを発言順に記す。

H・雑誌の経営法について提案したい。同人制の徹底、
季刊化、タブロイド新聞化、原稿料をとるとする方法
があると思う。

H・季刊化、タブロイド新聞化は今考えていない。同人
制はこれから一度まとめて提案する用意がある。

S・カンパの呼びかけを積極化したらどうか。支援グル
ープのことも考えたらどうか。

S・「リベルテール」は全国的支持を得たいというが、
それなら、それなりの努力をせよ。

M・「リベルテール」は大衆啓蒙とアナキストの機関紙
の二つの面がある。

H・思想性を主張するのなら全国的支持は無理。

H・横のつながりをもっと強く、又、全国誌を持ちたい。

Y・横のつながりはもとめているし、もとめてきた。

S・「リベルテールの会」が横のつながりを求めている
のか。個人的に横とつながろうとしているのか。

Y・僕はわからない。

S・「リベルテールの会」は発行体か、思想集団か。

Y・両方を対外的には要求されているように思う。

S・今聞くと「リベルテールの会」とアナ連準備会は同
じに聞こえる。ではなぜ合体しないのか。

S・同じではない。

S・ではどこが違うのか。

S・発行体と思想集団を分けよ。

S・「リベルテールの会」と準備会は共生していける。

(この後、少し準備会について話したが略す。)

当日、「リベルテールの会」という名称を中心にその
会の性格などが話し合いの中でしばしば問題となりまし
た。三浦さんは「リベルテール・サロン」で、そこに来
ている人がリベルテールの会の会員ということです。

又、ヤマモト・アキさんは「リベルテールの会」を発行
体の名称と考えているようです。

僕はそれらの上に立ってリベルテールの会を「リベル
テール・サロンと雑誌リベルテールを発行している」と
考えます。又、リベルテールの会会員とは三浦さんの言

うようにサロンで集合している人に冠せられる名称と考
えます。勿論、サロンに来ていても又来る人でも、
リベルテールの会会員を拒絶して来ている人来る人がい
ると思います。しかしそれはそれでいいと思う。

僕はこれらの発言を通じて、「リベルテールの会」とい
う名称はかつてに使用していいものなのだ。それを使用
して生じる対外関係はそれを使用した諸個人の問題なの
だ。」と理解しました。すなわちリベルテールの会は誰
の専有物でもないし、単に発行体でも、サロンでもない
のです。それはリベルテールの会という名称を使用した
人の使用目的の範囲内の存在であると考えます。だから

僕もこれからリベルテールの会という名称を使いたい時、
使いたいように使用するだろうし、又誰でも、そのよう
に使用できる。リベルテールの会がますますアイマイモ
コとしてくるかも知れませんが、僕は団体名称のように
リベルテールの会をとらえた発想はもう捨てていいと思
います。こうなるとリベルテールの会は三浦さんの発想
の所産のように見えるかもしれませんが、まさにその面
もあり、そして諸個人の参加の所産でもあると思うので
す。もち論、このような考え方は僕の個人的考え方で
す。

ただ僕のこのような考え方がリベルテールの会に関係

して下さった人々、現に関係している人々に認められた
時、少なくともリベルテールの会の名称を使用した行動は
『リベルテール編集部』にもおしえて下さい。きっと僕
達は互いに理解しあえると思いますから。

このような考え方は再び書きますが、僕の個人的「リ
ベルテールの会」観です。再び記します。(文責山本)

一つの感想

「リベルテール読者の会」を司会して、発言者の皆さん
から有益な指示や助言を受けました。ここではリベルテ
ールをどうするか：というよりどうあって欲しいかを述
べ出席できなかった読者にお知らせしたいと思います。
リベルテールが理論誌か情報誌かとの問いには、現状は
16頁建の小冊誌ですができるだけまとまった論旨のもの
載せたいと努力しています。そこで実際は特集や特別資
料で補ってまいります。しかし現状でさえリベルテールの
自立は費用の面でむづかしい所があります。それを兎角
これまで発行者の熱情と意志に依存してきたのです。編
集に参加している一人として真に残念ですが、冷徹な事
実なのは認めざるを得ないのです。読者の会の席上では
この点に付き、年配者から発意があつて何らかの支援態
勢が敷かれる様子でした。

To tell the truth, I had once imagined a decision what would have been, yet the examinations of previous trial were favourably carried on, which convinced me with a string of hope that the trial would have been put on fairly in comparison, but when I have heard the sentence, I felt the blood in my body caught a flame instantly with disappointment and indignation, while my weak flesh trembled. Oh! my poor friends and comrades! The most of them have been unhappily entangled into a scheme contrived by 5 or 6 persons. Merely with our acquaintanceship they have been forced to be a martyr. As they have been the anarchists, so they ought to be cast into an abyss of death.

Oh my poor friends and comrades! It was not merely I to have been surprized, but also attorneys, jailers, even police men who had attended at the trial on 16 January should have astonished and understood the truth of the affair with this barbarous decision. A common feeling has spread on the faces of the audience, which cristalized into a cold smile of indignation on lips of the defendantes. They could not express neither word nor voice. Oh! the supreme court! Fair decision! the Japanese Government! the civilized country in the Far East! Do it your savage, do your illegal massacre! You have already done in the Akahata Jiken (affair) ~~The Red Army~~, so this barbarous decision is not unreasonable? Remember my comrades and you, comrades over the world!

I wanted to comfort my comrades with a word. But I could not find a proper word because of my rage, so I muttered only "an astonishing illegal trial" Then I have put on an Amigasa all of sudden. Contrary to a shift of entrance, I was escorted to go first. I stood out. My friends and comrades whom I would have no chance to see each other hereinafter. Friends, who would go up to the gallows together. There might be friends who had a bitter feeling to us. Yet anyway they are my friends and comrades attended at court together. Farewell 25 persons! 25 sacrifices, farewell.

"I say SAYONARA all of you" hardly I exclaimed.

"Yes, good-bye!"

"Good-bye!"

A deep voice chased up after my back. When I stepped out the court, I heard "BANZAI" It might be that a passionate activist exclaimed "Anarchist Party forever!"

Kanno's diary is a long one, the complete version is issued by the Idea Publishing house in December. You can obtain it from Freedom Shop in London in February 1976 due to post mail system.

Y. Hashimoto

The Idea publishing House
c/o Matsuki Build.,
1-464 Higashiookubo, Shinjuku-ku
Tokyo, Japan

思うにリベルテールは69年末に発刊をみたのですが、当時は若い人達の熱気がすさまじく、ノンセクトラジカルの運動がしき烈でした。あれから満6年、リベルテールのサロンに出入りした若い人の数は多い筈ですし、その中の一人が言ったように「八犬伝」の一〇八つの玉がはじけ散るように、われわれは各地に飛び散って、リベルテールでやって行くのだ、必要ならばまたもとえ帰ることもある。Vそうあれかしと願ってリベルテールは続いてきたのです。だが何分浅学の身、事必ずしも志と違わないにしろ、ここでも意向と実際にはギャップがあるのです。その一つはリベルテールは書いて話したりで実際運動がないじゃないか、というものです。またリベルテールの会はその実体があいまいだという人もいるが、それは続けて読めば分ることで。私個人の考えでは意見を述べることで、それを理解して貰って、兎角アナーキズムでやろうとする人達と掛声をかけ合うに過ぎなくても、それが私の生きる状況にかかわる限り有意義で、それを離れる積りはないとしか申しあげられません。次ぎにリベルテールの会の実体については、これまで会に出た人がその場での会員だとの方式をとってきました。それはこの会の主催者の意向であって、それを認めた人がその限りで会員な訳で、その後その人を束縛する何も

もないのです。そこでリベルテール誌における声明文や他の会との接触で共働行動をとる場合の署名人としての「リベルテールの会」はそれに参加した人の責任において署名したものと理解しています。現在は大体編集に携わる者の名が出ています。では読者の立場はどうなるのかと問われるかも知れません。たまたま店頭でこの小冊誌を手にとられる読者から長年、私達の事業を理解して下さって購読して下さる方まで多様ですが、それは取りもなおさず各人のアナーキズムに対する意向または信念を表わすものであって、会の推進者がとやかく申し出たり規制する筋合いのものではないと思います。言論の自由の視点からすればデモクラシーから始まりデモクラシーに終るアナーキズムは（参照バクはその「告白」で自己を超デモクラットと規定している。）自由と平等と友愛の故に人類の理想であり、それが一国の政治的理由で規制を受けるとすれば、実にそれ故その国の民衆にとってアナーキズムの必要性を訴えているのだということとは、既に管野スガが「死出の道草」であると述べています。「リベルテール」はこれまで実体の不明瞭なイデオロギーによって他者を規定したり排撃したり、また自己中心的に組織化するのとはしていないし、これから自らの考えは持っていない。また去る者は追わずの仕方です

EXTRACTS FROM KAYNO'S DIARY

- A Diary of Loitering on the Way of Death -

by Suga Kanno

(The execution of Suga Kanno (1881-1911) was taken place on 25th January 1911. After 40 years her private diary which she had depicted since her death sentence in her cell (exactly from 18th to 24th Jan.) was found out. This translation is based on the arrangement by Kiyoshi Jinzai, who has compiled and edited "The Taigyaku Jiken Soshio Kiroku, literally The Judicial Record of High Treason Affair."

Even now her nature is somewhat distorted into a Vamp or an imitator of a Russian woman revolutionary or a shallow woman having no idea: but preferring a famous revolutionary, like Kotoku to her husband instead of Kanson Arahata, an unknown youth in those days during his confinement, etc. But we must not forget that she was the first woman revolutionary sacrificed her life in the name of Anarchism and at the same time a politically conscious woman in Meiji Era. Suga was lucky to have found out her identity on the verge of death as a revolutionary.)

On 18th January 1911, Sunday.

I have perceived to be sentenced by death penalty, yet I have worried about my comrades day and night, how many of them could be rescued, although my body has been carried away in a Kanshiya before noon.

I have seen police men wearing sabers on route of the metropolis covered soft beams of sun light through the window, which made me an anticipation of the result to-day. I have been anxious for opening court with burning patience. The time has come. I have been escorted up to the 1st floor, the 2nd floor, then again to the 1st floor, the Supreme Court, without mentioning the route, even in the court guarding has been reinforced two times comparing that of a public court. Furthermore attorneys, journalists and the attendantes were so crammed that the wide court seemed to be filled with the audience. I have felt a slight dizziness as I have had a rush of blood to the head because of difficulty of breathing due to coming up and down, then suffocating with a stuffy court. Having calmed myself for a while, I have seen my comrade-defendants, but they have showed their anxiety on their brows and kept silence, even being afraid to smile each other.

(Her waka, a poem was inserted here, but erased afterward.)

A sacrifice of 25 years of age
is placed before a herd of lion
showing claws and fangs.

After a while, the judges have appeared from the right door in front of us. Death or Life, the fates of 26 prisoners have been suspended before our eyes. They might have felt a thrill. The clerk had read the names of defendant as usual, the chief judge, Mr. Tsuru opened his mouth with two or three instructions, then having moistured his throat with water from a cup, he read a long decision by postponing the main sentence. During his reading and my listening, I have felt a surge of anxiety spreading in my heart, for the distortion connected to the article 73rd has become intolerable, though I have been patient enough by praying even if a comrade would be lightened with his penalty. But alas! it has been all up with us. Besides 11 years of imprisonment of Miita and 8 years of Zenbei Niimura, the rest 24 comrades have been subjected to death sentence:

《内ゲバの収束と根絶を期待して》

の呼びかけに対する回答

アナーキストに内ゲバはない筈だ

— A 説 —

内ゲバは反(半)革命ですよ

— B 説 —

歴史的事例

一 比叡の荒法師と加茂川の水は

朕の意に染まぬ 御白河法皇

二 本能寺の変 明智光秀

三 幸徳さん あんたとおれとどちらが先に革命をやるか。こんなところにてやらん。

坂本清馬

四 日本には皇道派と統制派の確執がある。

二・一五事件

五 きのは勤皇、きようは佐幕

新納鶴千代 ままならぬ

— サムライ・ニッポン —

弁証法的因果関係(無の貫徹)

統一するから分裂する、

分裂するから統一にあこがれる。

アナーキストの論理と倫理

至る所が中心だ、辺境はどこにもない。

署名おねがい人殿

己の存在を明瞭にしている筈です。編集の立場から見ると、わが老年と青年は自己主張が強く、客観的な記述は不得意な憾みがあるが、幸いアナーキズムは唯我独尊、生の拡充を標ぼうするのでからその弊害の多少は甘受しなければなりません。要するに「リベルテール」誌は各自の自己啓発の場として、アナーキズムでやろうとする人達が何らかの暗示なり、示唆を受け、またその縁で発言や参加を受ける場なのであって、きんらきんらの錦の御旗をかけたたり、ヤクザもどきの何々連合とは無縁です。もっとも流動する社会にあって情況に流されつゝ何かと達成するかどうかは、ここにどう個人の思慮の及ぶ所ではなく、それは参加している者の力量と共働の度合によると申せましょう。これが新年度(12月より)を引きつづき受け持つ編集者の一人として、「読者の会」を司会した感想です。

(文責はしもと)

「アナーキズムと現代」のあとがき読後感

大沢正道氏の Anarchism は
Anarchism に入らない程大きい、
だがブルドン・バク・クロは偉大だ。

— 好好学習・天天向上 —